

政治体制転換期以降のモンゴル国の都市家族に見える夫婦の役割分業に関する研究

——モンゴル国の首都ウランバートル市を調査対象に——

オルラグ (Urlag, 烏日麗格)

1. はじめに
 - 1-1. 研究背景と研究目的
 - 1-2. 調査の概要
 - 1-3. 本研究の分析対象者の属性
2. 男女の労働力率の変化
3. アンケート調査からみる夫婦の役割分業の実態と役割分業観
 - 3-1. 掃除・洗濯と炊事の役割分業の実態
 - 3-2. アンケート調査からみる役割分業観
4. 聞き取り調査の結果からみる夫婦の役割分業
 - 4-1. 家事、炊事の役割分業の実態
 - 4-2. 聞き取り調査からみる役割分業観
5. 夫婦の役割分業の多様化とそれをもたらした原因
6. 結論

1. はじめに

1-1. 研究背景と研究目的

1-1-1. 背景としての政治体制移行国家モンゴル国

現在のモンゴル国の国民は、前世紀初頭から一世紀にも満たない間に、イデオロギーを異にする三つの国家を経験してきている。第一に、1911年に清朝の支配を脱しモンゴル仏教の最高権威者である高僧が国家元首の座についた君主制国家の「共戴モンゴル国」である。第二に、1924年に社会主義革命が成功して成立し1992年まで続いた「モンゴル人民共和国」である。第三に、1992年に民主憲法を制定して成立し現在まで続いている民主主義国家「モンゴル国」がある。より厳密に書くと、1924年から1990年まではモンゴル人民革命党の単独独裁による社会主義を経験した。ソ連東欧の民主化運動の影響を受けて1990年には人民革命党が単独独裁を放棄し、自由選挙を実施してから1992年に民主主義憲法が制定されて社会主義を完全に放棄して民主主義国家であるモンゴル国が成立する

までは政治体制の移行期を経験した。そして1992年以降は民主化と市場経済化の道を進み、2010年には当時の首相が国会で、市場経済への移行が基本的に終了したことを宣言し、移行期が完全に終了したものとされている。社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への転換にあたっては、IMF主導による「ショック療法」によって急激に移行した。その結果、国民の生活は極端な混乱に落ち入り（ロッサビ2007：84～87）、各家庭も巻き込まれ家計も強いダメージを受けた、支出が収入より多くなった（表1）。

表1 ウランバートル市一世帯の平均月収入支出差（1992～2013年）

年	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
収支差	-328	-632	-268	2874	2078	4471	1283	-8612	-2896	0	-25763
年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
収支差	13405	-10959	-27744	-54425	-33166	-38807	-12119	-5580	25019	26010	55342

（出所：ウランバートル市統計局ホームページのデータにより筆者が作成した。）

先行研究によれば、遊牧地域におけるモンゴル人は「家庭の筆頭者である夫は、家庭生活と関係する問題を自ら解決し、体力が求められる重労働（家畜の放牧、荷を運んで狩りをするなど）を行っていたのに対し、家庭生活においてはその妻が少なくない義務を果たしていた。ただし、家畜の売買は二人で決めることであった。女性は家事をする、ミルクを用意する、乳製品を作る、家族全員の衣服を縫う、編む、育児する、小家畜（羊、山羊－筆者補）を放牧するなどのことをしていた。もし夫が狩りに行ったら妻が家の内外のすべてのことを担っていた」（Dondog 1977：50）。

モンゴル人民革命党が指導する社会主義国家であったモンゴル人民共和国時代には、全労働者の中の女性の比率は1985年現在で51.3%を占めていた（*BNMAU-yn Uls Ardyn Aj Ahui 65 Jild* 1986：32）。1973年の家族法には、結婚者の義務について15条の第2項に「お互い平等に家事労働に参加し、教育レベル、技術水準を高め、国民が役割を忠実に果たすためにお互いが助け合う義務がある」（*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Büliin Huuli* 1973：12）と定めた。このように、社会主義の理念として、男女平等に関して制度的支援があって、「特に男女の区別なく、国民は義務及び権利として就労するという社会主義の考え方は女性の就労機会を拡大し、女性自身が収入を得ることで女性の平等意識と自立意識を高めた」（鯉淵2005：54）とされている。しかし、社会主義を放棄して民主主義国家への体制移行に伴い、社会福祉、保健医療、教育という公共サービスが切り捨てられ、政府は小さな政府を目指した（ロッサビ2007：206-207）。

1-1-2. 研究の目的：「近代家族論」でとらえるモンゴルの都市家族

筆者は、上述のような激動がモンゴル国の家族内部に与えた影響を如実に示すのが家族内での性別役割関係であると考えた。鯉淵は2004年にモンゴル国で行った「家族関係の

現状」のアンケート調査の中の「息子・娘への親の関与比重 (%)」の結果から、モンゴルでは、「財産分与や家庭内の決定権は男が持つべきだとし、家事は女のものという伝統的な意識が根強くあることが分かる」(鯉淵 2007: 22) とし、「家庭生活への夫婦の関与度合 (%)」の結果から、夫の関与が大きいのは家計収入のみで妻が多く、他の項目はどれも夫婦が同じように関与しているので、厳格に役割を定めるというのではないことを指摘した(鯉淵 2007: 25)。しかし夫婦の役割分業の実態と役割分業観との関係を考察した研究は未だ現れていない。

日本における家族社会学研究では、夫婦の役割分業に関する研究はマルクス主義フェミニズムの影響を受けた「近代家族論」が推進してきた。「近代家族」は落合恵美子が日本に紹介したものであり、近代化と産業化が進むと同時に出現して拡大した家族のことを言う。産業化が進むと、経営体としての「家」は衰退し、「『人間』供給のために必要なシャドウ・ワークを遂行する仕組みとして成立したのが、性別役割分業である」(落合 2000: 20)。日本における“夫は稼ぎ手、妻は主婦”という性別分業は近代という時代の産物である(落合 2008: iv)と主張して、「家内の領域(domestic sphere)は女、公共的領域(public sphere)は男が担う」のは近代的常識となった(落合 2000: 15)。このような、日本の近代を前提にした「近代家族」は、かつて近代化過程に社会主義的近代化と産業化の道を経験して民主主義国家時代を歩んだモンゴルの都市家族にも出現するか否かをぜひ検証してみたい。なぜならば、その当否によって、モンゴルの都市家族の特徴を明らかにするための道が開けることが期待できるからである。というのも、モンゴルにおける家族論には「近代家族」に類する議論が存在せず、体制移行前と移行後、そして現在の家族、とくに都市家族を「近代」あるいは「近代化」から考察することができない状況にある。下に紹介する小長谷の見解を容れれば、今のモンゴル国もすでに近代化を経たことになっている。これに鑑みれば、既存の「近代家族」・「近代家族論」はモンゴルの都市家族を研究するための方法論のひとつとしてありうべきものといえよう。

かつて社会主義であった東アジアの社会主義圏の近代化について論じた瀬地山角は、夫婦の役割分業について「しばしば女性は労働力として外にかりだされた上に、家事分業も担わなければならないという意味で、典型的な二重負担に苦しむ場合が出てくる。さらにもともと二人で働かなければ生活できないような貧困圧力がかかって、女性が労働市場へと引っぱり出されている面もあるために、既婚女性の中には、男性の稼ぎが増えれば家庭に入りたいという層もある程度存在する」とする。したがって、なんらかの形で脱社会主義化したときに「高収入層では主婦も誕生する」と主張する(瀬地山 1996: 79~82)。ならば社会主義を脱した現代モンゴルに主婦も誕生しているのだろうか。また、モンゴルでは社会主義時代に男女平等の法制化や男女が等しく労働することはすでに実現されたことになっている。先行研究によれば「女性自身が収入を得ることで女性の平等意識と自立

意識を高めた」（鯉淵 2005：54）。しかし、社会主義が崩壊して社会主義時代の男女平等の法制化が崩れてしまったことで、女性の自立意識にも変化があるのだろうか。そしてそれは夫婦の役割分業にどのような影響をもたらしているのだろうか。このように、モンゴルの社会主義時代の近代化や社会主義から民主主義への移行、社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への移行がモンゴルの女性ならびに家族に与えていると予測される問題がある。

以上のような先行研究やごく初歩的な問題意識を踏まえ、本稿では次のような探求課題と仮説を設定する。すなわち、遊牧を生業基盤とし、社会主義の道を通る過程で近代化し、後に政治体制の移行期を経て民主主義国家としての歩みを進めるモンゴル国では「近代家族の諸特徴がみられるのか」を探求課題とする。この探求に当たっては、落合が挙げた「近代家族」の諸特徴である、①家内領域と公共領域の分離、②家族構成員相互の強い情緒的關係、③子供中心主義、④男女役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退とプライバシーの成立、⑦非親族の排除、⑧核家族（落合 2000：18）のうち、特に「男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業」を仮説として設定する。仮説の検証を通じて、社会主義国家から民主主義国家へ、という政治体制の転換を経験した国における役割分業の特徴を導出する。

この探求課題と仮説についてもう少し具体的に述べておこう。現在のモンゴル国は、社会主義国家であったモンゴル人民共和国を70年経験し、この間に平等というイデオロギーを強く宣伝された。現在のモンゴル国は、政治体制移行期後の経済復興・発展の時代を迎えている。このようなモンゴル国の都市社会に生活する家族を、先行研究が明らかにした遊牧生活における性別役割分業、社会主義時代の夫婦役割分業の実態を踏まえ、筆者が独自に行ったアンケート調査と聞き取り調査の結果を用い、先行研究がまだ考察していない民主主義国家・市場経済における夫婦の役割分業の実態を明らかにしたい。また、先行研究が定義する「近代家族」としての特徴の一つである、男は公共領域、女は家内領域という性別役割分業がモンゴルの家族にも看取されるのかを明らかにする。これを通じて、日本とは異なる牧畜・遊牧という基層的な生業形態を持ち、社会主義国家・計画経済から民主主義国家・市場経済への移行という異なるイデオロギーと歴史的経験を持つ北東アジアの国家の都市家族における夫婦の役割分業の実相を明らかにすることに努める。モンゴル国が属する北東アジア地域には、同じく体制移行を経験した大国ロシアや、今なお社会主義国家ではあるが市場経済に移行した中国が存在する。体制移行国家の都市家族論は北東アジア地域においてこそ論じられるべきである。体制移行を経験した国家の都市家族における夫婦の役割分業論を構築のための手がかりを提示したい。

1-1-3. 調査対象

本稿での調査対象は、モンゴル国の首都ウランバートル市の住民に限定する。小長谷は社会主義近代化の中の産業化革命について、産業化の一つの軸は「草原ではないものが作られたこと。すなわち『首都建設』であり、中でも『首都における工場の建設』は『工業化革命』である」と評価した（小長谷 2004：18）。近代家族は近代化、産業化が進んで都市で形成した家族についての議論である（落合 2008：44～45）、民主化時代には、市場経済が浸透し、全国総人口の半分以上がウランバートルに集まるようになった。また、生活習慣の変容をもっともよく反映するのは都市家族であるので、本稿もこの点を考慮し、都市家族に焦点を当てることにする。社会主義以前の時代、現在のウランバートル市には市民がほとんどいなかった。1920年代から人が集まりはじめ、都市建設は社会主義時代から行われた。よってウランバートル市民の家族生活史はモンゴル国民の社会主義国家から民主主義国家までの歴史の流れを代表するという点も都市家族に焦点を当てる理由として挙げておきたい。

1-2. 調査の概要

本稿で用いるデータは、筆者がモンゴル国の首都ウランバートル市で20歳から75歳までの男女を対象として実施したアンケート調査と聞き取り調査によって得られたものである。

アンケート調査は2011年7月14日～7月31日に予備調査を行った後、2011年8月1日～10月15日に本調査を行った。調査は便宜的抽出法を使った。本人が知人を通じて、職場、学校、自宅を訪問し、自ら配布してその場で回答をもらうとともに、調査協力者に頼み配布して留置調査を実施した。予備調査で60部を配布し、43部を回収した。回収率は71.7%であった。本調査では全300部の調査票を配布して、239部を回収した。有効調査票は237部、有効回収率は79.0%であった。

聞き取り調査は3回にわたって、延べ46人（調査対象者の中の一人に対して2回調査を行ったことがある）を対象に実施した。2011年の聞き取り調査は2011年8月～10月の間に、9人の対象者に対して1対1で聞き取りを行った。2012年8月～9月に二回目の調査を行った。2012年の聞き取り調査では、一度のみ対象者6人でのグループインタビューを実施したが、それ以外は1対1で面接調査を実施した。いずれも対象者の同意を得てICレコーダーで録音した。聞き取り調査では、あらかじめ決めておいた質問項目に沿って、調査対象者に平均15分程度話してもらった。調査対象は、便宜抽出法、機縁法、雪だるま方式によって集められた。そして2014年の9月にインターネットを通じて、追加調査を行い、本稿で議論する役割分業と役割分業観と関連する質問を知人の男女6人に聞いた。

1-3. 本研究の分析対象者の属性

本稿での分析対象は、調査対象者の中の20代、30代の人々である。なぜ20代、30代を対象としたのかというと、モンゴル国の首都ウランバートル市に居住する20代と30代は、政治体制移行期の1990年には0～10歳で、社会主義時代の影響を受けていないと考えられるからである。本稿に関わる分析対象者の属性を表2に示す。

表2 アンケート調査による分析対象者の属性

	男性		女性	
	度数	比率	度数	比率
年齢				
20～29	20	60.6%	65	57.0%
30～39	13	39.4%	49	43.0%
計	33	100.0%	114	100.0%
婚姻状況				
未婚	13	39.4%	39	34.2%
同棲	3	9.1%	4	3.5%
初婚	16	48.5%	62	54.4%
再婚	1	3.0%	5	4.4%
離別	0	0.0%	4	3.5%
計	33	100.0%	114	100.0%
職業				
自営業	0	0.0%	6	5.3%
公務員	18	54.5%	58	50.9%
会社員	1	3.0%	3	2.6%
大学生	12	36.4%	41	36.0%
NPO	1	3.0%	2	1.8%
パート	1	3.0%	0	0.0%
無職	0	0.0%	1	0.9%
その他	0	0.0%	2	1.8%
無回答	0	0.0%	1	0.9%
計	33	100.0%	114	100.0%
学歴				
高校卒	7	21.2%	21	18.4%
専門学校卒	1	3.0%	4	3.5%
大学卒以上	25	75.8%	89	78.1%
計	33	100.0%	114	100.0%

(出所：筆者の実施した調査により、得られたデータである¹⁾。)

1 以下、出所をつけない図表は本人の調査によるオリジナルなデータによるものである。

表3 聞き取り調査による分析対象者の属性

記号	年齢	性別	婚姻状況	学歴	職業
A	39	女	既	専門学校卒	パート
B	39	女	既	高卒	販売業
C	36	女	既	大卒	商売業
D	28	女	既	大卒	商売業
E	31	女	既	高卒	パート
F	27	男	既	大卒	会社員
G	29	男	既	博士	公務員
H	38	女	既	大卒	専業主婦
I	39	男	既	大卒	NGO
J	26	女	既	大卒	NGO
K	35	女	既	大卒	商売業
L	27	女	既	大卒	商売業
M	38	女	既	大卒	NGO
N	26	女	既	高卒	パート
O	21	女	既	高卒	大学生
P	20	男	未	高卒	大学生
Q	21	女	未	大卒	無職
R	38	女	既	大卒	公務員

2. 男女の労働力率の変化

まずは、モンゴル国の1990年、2000年、そして2005年から2012年における労働力率の男女比、即ち仕事をしている人や積極的に仕事を探している人を含む労働市場に従事する国の生産年齢人口（15歳以上）の割合を男性対女性の比率で表したものを図1で示す。

図1を見るとモンゴルの労働力率の男女比は1990年に0.839あった。その後ゆっくり上昇し、2005年は最高の0.850に達したが、その後ゆっくりと下降しながら、2010年から2012年にかけては0.815を保っていた。

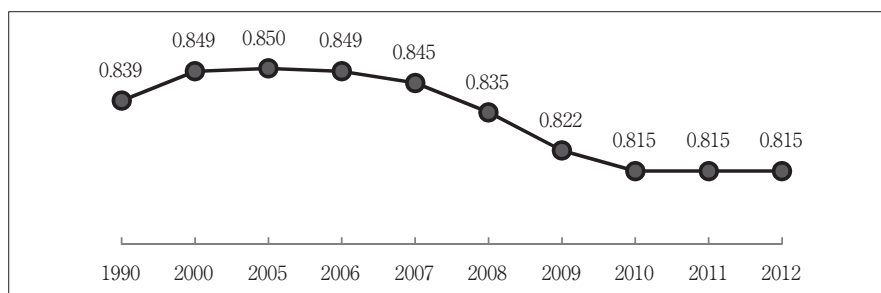


図1 モンゴル国1990、2000、2005～2012年の労働力率の男女比(女/男)

(出所：国連開発計画 UNDP の統計データにより筆者が作成)

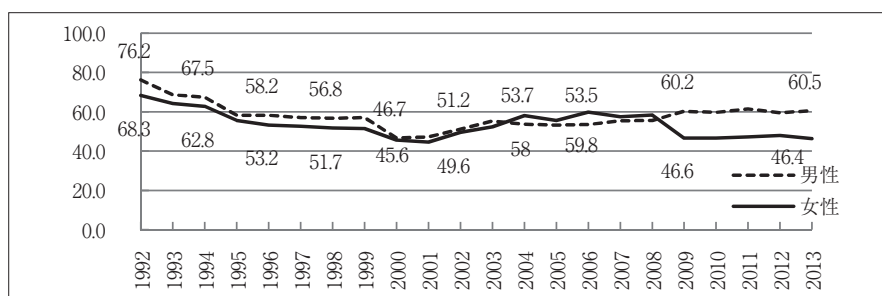


図2 ウランバートル市における男女別労働力率（1992年～2013年）

（出所：モンゴル国国家統計局ホームページのデータにより筆者が作成）

次に、図2を見よう。これは1992年から2013年までのウランバートル市の労働力率の推移を男女別で示したものである。1992年時点でウランバートル市の男性の労働力率は76.2、女性の労働力率は68.3であった。その後、男女とも労働力率が下降し、2000年に男性の労働力率は46.7、女性の労働力率は45.6となった。2002年からは男女とも労働力率が上昇したが2003年までの女性の労働力率は男性よりやや低い状況が続いた。男性の労働力率は2013年現在60.5まで上がり、女性の労働力率も2004年から2008年まで上がって男性の労働力率を上回ったが、2009年に急落した。その原因についてJICAの報告書では「2009年の不況以降の女性への雇用の減少及び、女性の就学率の上昇による影響である」（「国別ジェンダー情報整備調査モンゴル国報告書」2013：iii）としている。2013年現在の女性の労働力率は46.4であり、男性より14.1ポイント低くなっている。

3. アンケート調査からみる夫婦の役割分業の実態と役割分業観

3-1. 掃除・洗濯と炊事の役割分業の実態

以上のような状況を踏まえて、夫婦の役割分担の実態を考察するために、家事の中から日常的によくする「掃除と洗濯」、「炊事」の二つの項目を取り上げる。炊事、掃除、洗濯は家事の代表である（山田1994：143）。炊事は家事の中で最も時間がかかり、掃除・洗濯とは違って毎日行うべき家事である。このため、掃除・洗濯と炊事を別々に取り上げて分析を進めることとしたい。なお3-1では、夫婦間の役割分担の実態を考察するので、回答者の内の既婚者のみを分析対象者として扱う。調査表では家族領域内の役割分業について「掃除と洗濯の頻度」と「夕食を作る頻度」を尋ねた。

被説明変数は、男と女が「洗濯と掃除」、「夕食を作る」を行う頻度である。各項目の行う程度を、週6-7回=7.00回、週3-5回=3.50回、週1-2回=1.00回、月1-3回=0.25回、三か月1-2回=0.02回、年1-3回=0.01回、年1回もない=0.00回に換算している。

表4 20代・30代男女の性別年齢別洗濯・掃除実施頻度（度数と比率） n=80

性別	男性			女性			総計
	年齢	20-29	30-39	合計	20-29	30-39	
週6-7回	2	0	2	8	13	21	23
	22.2%	0.0%	11.8%	30.8%	35.1%	33.3%	28.8%
週3-5回	4	3	7	11	5	16	23
	44.4%	37.5%	41.2%	42.3%	13.5%	25.4%	28.8%
週1-2回	1	3	4	7	16	23	28
	11.1%	37.5%	23.5%	26.9%	43.2%	36.5%	35.0%
月1-3回	0	1	1	0	2	2	3
	0.0%	12.5%	5.9%	0.0%	5.4%	3.2%	3.8%
年1回もない	2	1	3	0	1	1	4
	22.2%	12.5%	17.6%	0.0%	2.7%	1.6%	5.0%
合計	9	8	17	26	37	63	80
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表4は20代、30代の対象者の洗濯、掃除実施頻度を表している。「週に6-7回」実施と答えた人は、男性は全17人の中の11.8%にあたる2人であり、女性は全63人の中の33.3%に当たる21人が実施している。「週3-5回」実施する人は男性の41.2%（7人）を占め、女性は25.4%（16人）である。「週1-2回」と答えた男性は23.5%（4人）であり、女性は36.5%（23人）である。「月1-3回」と答えた男性は5.9%（1人）、女性は3.2%（2人）、「年1回もしない」人が男性の17.6%（3人）であり、女性の1.6%（1人）である。男性の平均値は2.515であり、女性の平均値は3.596である。つまり、男性よりも女性の方が洗濯・掃除の頻度が高い。

次に表5で対象者の夕食を作る頻度を見てみる。60.3%（38人）の女性が週に6-7

表5 20代・30代男女の性別年齢別夕食を作る頻度（度数と比率） n=80

性別	男性			女性			総計
	年齢	20-29	30-39	合計	20-29	30-39	
週6-7回	4	0	4	15	23	38	42
	44.4%	0.0%	23.5%	57.7%	62.2%	60.3%	52.5%
週3-5回	1	2	3	7	7	14	17
	11.1%	25.0%	17.6%	26.9%	18.9%	22.2%	21.3%
週1-2回	2	2	4	3	5	8	12
	22.2%	25.0%	23.5%	11.5%	13.5%	12.7%	15.0%
月1-3回	1	3	4	1	2	3	7
	11.1%	37.5%	23.5%	3.8%	5.4%	4.8%	8.8%
年1回もない	1	1	2	0	0	0	2
	11.1%	12.5%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%
合計	9	8	17	26	37	63	80
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

回であるのに対して、男性は23.5%（4人）に止まっている。週に3-5回炊事する男性は17.6%（3人）であり、女性は22.2%（14人）である。週に1-2回炊事する男性は23.5%（4人）だが、女性は12.7%（8人）である。「月1-3回」と回答した男性は23.5%（4人）であり、女性は4.8%（3人）である。年に1回もしない女性はいないが、男性は11.8%（2人）いる。平均値をみると、男性は2.559であり、女性は5.139である。つまり、女性のほうが男性より頻繁に炊事を行っているといえる。

以上から、女性の方が男性よりも頻繁に洗濯・掃除を行い、夕食を作っているといえる。

3-2. アンケート調査からみる役割分業観

「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」という性別役割分業観を問う質問に対する答えを見てみよう。

図3は、上の問いへの回答を性別で分けた結果である。男性は「強く賛成する」を選択した人が31.3%、女性は8.6%である。「賛成する」を選択したのは男性の34.4%、女性の46.7%である。この二つを肯定派としてひとくくりにすると、男性の65.7%、女性の55.3%となり、男女ともに半数を超えているが、男性の方が女性より10.4%多いことがわかる。

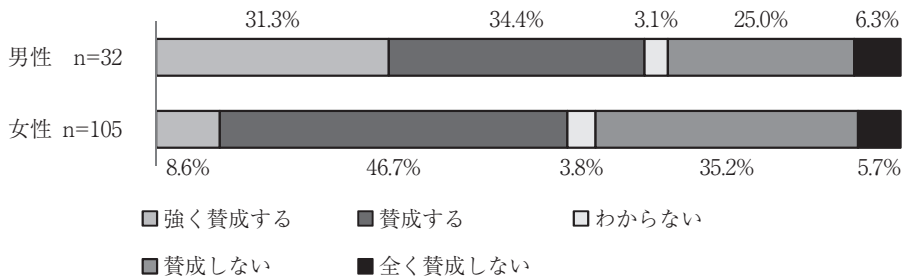


図3 男女別の「夫は仕事を担って、妻は家事を担うべきである」に対する賛否

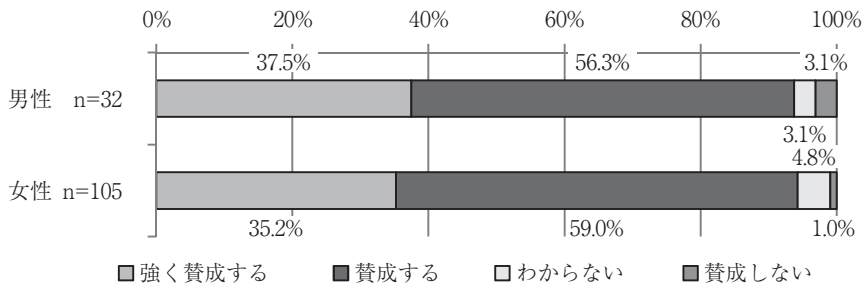


図4 男女別「男性もできるだけ家事をするべきである」に対する賛否

次に、「男性もできるだけ家事をするべきである」に対する賛否を尋ねた。

「強く賛成する」と答えた人は男性の37.5%、女性の35.2%である。「賛成する」と答えた人は男性の56.3%、女性の59.0%である。肯定派は男性の93.8%、女性の94.2%に達しており、女性が男性よりわずか0.4%多い。

以上、夫婦の役割分業と役割分業観に関するアンケート調査の結果をまとめると、掃除・洗濯と炊事などの家事は、対象者の中の妻が夫より担う頻度が高い。そして「夫が仕事を担って、妻は家事を担うべきである」という性別役割分業観には男女とも半数以上の人が賛成し、男性の方が女性より賛成する割合が高い。「男性もできる限り家事をするべきである」に賛成する人は男女とも9割を超えている。このことから、対象者たちは、夫婦の性別役割分業を支持する一方で、男性の家事参加に反対しない考えを持っていることがわかる。

4. 聞き取り調査の結果からみる夫婦の役割分業

4-1. 家事、炊事の役割分業の実態

「家族の中での妻と夫の役割は何ですか」との質問に対する答えに着目しよう。「家事」に関する回答がなかった場合には「家事は誰が担っているか」と重ねて尋ねた。

B：私は家事をして、育児をします、… 夫は子供を養う責任があります。(Q：夕食を誰が作りますか。)いつも私が作ります。夫は(料理を-筆者補)しません。(Q：家事は。)私がします。子どももします。

C：モンゴル人の伝統的な役割分担にしたがって行います。二人で子どもを育てて、生まれた国であるモンゴル国のために奮闘しています。(Q：家事と夕食はだれがしますか。)家事は私がすることが多いです。料理は私がします。大きな子どももします。長男は今年12歳です。料理をし、弟を送迎し、家事もします。すべてをしますよ。私たち二人は仕事で忙しいので、子どもにすべてを教えしました。

D：今は新しい住宅を買ったので、ローンを背負っています。今はしばらく夫の両親のハシャー²⁾にゲルを建てて住んでいます。夫の給料でローンを払うので、私は家庭のことを担います。私は家事をして、料理もします。

H：妻の役割は子供を育てること、夫のことを気遣うこと、家をよくするなどと思います。夫は仕事をします。最近は妻も仕事をできるようになっています。私にとっ

2 ハシャー(「塙」)とはゲル地区の住居単位。ゲル地区では、ゲルや固定家屋と若干の庭相当のスペースが板塙で囲まれている。

て子育てをして、夫が安心して仕事ができるようにします。（Q：モンゴルには、あなたのように子育てに専念して、仕事をしない人がたくさんいますか。）たくさんいますよ。シングルマザーならよく仕事をしますけれど。（Q：なぜ幼稚園に預けないのですか。）この区にきてもう2年になりました。幼稚園に預けようと思ったのですが、幼稚園側が受け入れてくれません。

以上の4人は夫が仕事に専念して、妻が家事を担うと答えたものである。

Bは商売をし、夫は運転手で、2人の子どもがいる。Bは自ら市場で商売をしながら家事、育児、炊事を担うのに対して、夫はお金を儲けて、子どもを養う責任があるが家内領域における家事、炊事に参加しない。Bの家族においては、夫は公共領域を担い、妻は公共領域を担い、さらに家内領域を全部担っている。

Cの家族では、夫婦は商売をしている。夫は単純に商売をするのに対し、妻は商売をし、さらに家内領域の家事、炊事の担い手であることが分かる。

Dは調査当時にゲルに住んでいた。夫婦両方が仕事をしており、夫の給料でローンを返済し、妻の給料で生活している。家事、炊事は妻が担っている。夫は家内領域に参加しない。

Hは専業主婦で、夫はウランバートル市から800キロメートル離れた炭鉱で働いている。一か月間勤務、半月休暇のシフトで働いている。Hの場合は夫が公共領域、妻は家内領域に位置づけられる。妻は子育てに専念している。

これら4ケースの中のH以外の3ケースは共働き家族である。つまり夫が公共領域を担い、妻は家内領域という性別役割分業があるとともに入計に貢献する人である。

次に、夫婦ともに家事、炊事をすると答えたケースをみてみよう。

J：家事は二人でやります。でも家事と言えば、女が多くやる義務があります。夫は家事もします。何をするかと言うと、私の家はゲル地区³⁾にあるので、水を汲む、燃料を用意する、壊れたものを修理するなどのことをします。たまに炊事をします。私の夫は家の中の家事をすることが好きではないのでたまにしかしません。

I：私は寝ます、食べます。壊れたものを修理します。たまに料理を作り、たまに家の掃除をします。あまりしません、ちょっとだけします。

K：各自の責任を負います。夫はちょっとお金を稼いで、商売をしようと思っています。私は家の中でこまごまとした家事をしたり、（市場で商売して－筆者補）お

3 ゲル地区とは、ゲルや煉瓦、木材で建てた固定家屋で暮らす人々が集中している、都市中心部の周囲に広がる地区を指す。

金を稼いだりしています。(Q:料理を誰がしますか。)料理は私だけが作ります。夫は私が留守にする時に子どもたちに料理を作ってあげます。私が家にいる時には全然作りません。私が遅く帰る時には作ります。

E:生活していく面では夫の役割はより多いです。私は家事などをします。夫は外のことをします…夫はもともと外で働きます…夕食は暇な方が作ります。

上の4ケースは共働き家族である。夫婦ともに家事を担っていると言える。

Jは、「家事は二人でやります」と答えながらも「家事といえば、女が多くやる義務があります」と答えている。ここでJの「女は家事の担い手であるはず」という認識が見える。Jはゲル地区居住者なので、戸外から燃料や水を住居に運び込むなど体力のいる家事は夫が担っている。このように家内と家外で家事を分業している。

Iはアパートに住んでいる。妻は家事を担って、夫は「壊れたものの修理」をし、「たまにご飯を作り」、「たまに掃除」をしている。つまり「たまに」家事をしている。Iも家事をするが参加の頻度は妻より低いことが伺える。すなわち、Iの妻が家事の主な担い手である。

Kは「各自の責任を負います」と答え、さらに「私は家の中のこまごまとした家事をします」と証言した。Kの夫はKが不在の時には子どもたちに食事をつくるが、Kが在宅時には料理をしない。Kの家族では夫も家事に参加するが、家事の担い手は妻であるという認識と実態が察せられる。

Eの家庭では、妻は家事を担い、夫は外のことをするという役割分業が定着している。ただ、炊事は暇な方が作るというので、夫も家事参加しているといえる。

以上は、夫婦ともに仕事をして、家事を担うケースである。共通する特徴は、妻が家事の担い手であるという意識を持っていることである。

次の5つのケースに移ろう。

M:役割をわけていません。早く帰ってきた者がします。夫のほうが早く帰ったら料理を作ってお茶を煮ます。(夫は-筆者補)「Mが帰ってきて私に料理を作るべきだ」と(は思いませんので、夫は私が料理を作るのを-筆者補)待ちません。二人の子どもも作ります。

L:平等に、早めに帰った者が家事をします。

F:私の家族は平等な関係を持っていて、ヨーロッパ式です。二人で誰が何をすることを決めたことはありません。妻も自分の生活を持っていますし、私もそれを尊重すべきです。私たちは家事を一緒にして、子どもを一緒に育てます。一緒に物事を決めます。二人は相手に無理強いはしません。

O:家事は私がします。夫もします。

A：モンゴルの家庭の中では、妻はこれをやる、夫はあれをやるという決まりはないです。暇がある人がします。

Mは「役割をわけていません」、Lは「平等に」、Fは「家族は平等な関係をもっています」、Oは夫婦ともに家事する、Aは「モンゴル人の家庭の中に役割に決まりがありません」と答えている。この5ケースの共通点は誰かが家事、誰かが仕事という役割分業意識を持っていないことである。つまり、夫は仕事もし、家事もする。同じように妻も仕事と家事を担う。このように役割分業が決められておらず、家事の担い手が明確でない状態を、「平等」と評したり、「モンゴル人には役割分業がありません」と理由付けする人もいることがわかる。

その他わずか一例にとどまったが、Nが「夫がすべてをします」と答えた。

4-2. 聞き取り調査からみる役割分業観

「性別役割分業」に賛成かどうかを聞く際には、「性別役割分業」とは女が仕事をせず、専業主婦になることであると説明したうえで、「夫一人の給料が一家にとって十分であれば、専業主婦になるか（妻を専業主婦にさせるか）」と聞いた。

Gの妻は幼稚園の先生で、大学院を卒業する時に妊娠していたため、就職しなかった（調査当時）。子どもが1歳3カ月の時に子どもを連れて職場に戻った。Gはアンケート調査では、夫婦の役割分業について「強く賛成する」、「夫もできる限り家事をするべきだ」に「強く賛成する」と答えたのだが、実際にどれほど家事をしているのかについては、家事は年に1～3回する程度で家事と料理は妻に任せていると答えた。2012年の調査では、「私はご飯を食べ、…たまに床の掃除をし、食器を洗います。今は料理を作っていません。弟がしています。日曜日は私の当番です」と言った。追加調査の時にはGの妻は就職していた。就職の原因を聞くと「妻が家にいることは気の毒です。発展しません。私はそう思います。子育てをするために妻が家にいる必要はありません。子どもが幼稚園に行けば、もっと早く社会生活に慣れるようになります」と答えた。Gの家庭においては、妻は家事と育児の担い手であり、夫は「たまに」家事をするが、Gは妻が就職もせずに専業主婦になることに反対する考えを持っていることがわかる。

Fは次のように答えている。

F：もし私が十分な給料をもらったら、妻が自分でそうしたいと思って仕事をしたかったらさせるし、したくない、家にいたいと思ったら家にいてもいいです。その人の自らの気持ちを大事にします。なぜかという、その人が、お金のためよりも自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事と思ったら仕事をしてもいいし、もし仕事をしてストレスがたまったら仕事をしなくてもいいです。私は女性が仕

事をするかどうかを自ら決めるべきと考えます。

すでに見たように、このFは、家庭内の夫婦役割分業を「平等な関係を持って、ヨーロッパ式です」と答えた人物である。そして2014年の追加調査では、上のように妻の意見を尊重する考えを示し、妻が働くことは「お金のためよりも自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事」という考えを持っていることを明かした。

Rの長男は高校生、長女は3歳。夫は仕事に専念し、妻のRは昼には仕事し、帰宅して料理を作る。Rの家庭では、妻が家事の担い手であり、夫は家事に参加しない。息子が家事を分担している。夫は毎年3月8日の女性の日の年に1回だけ家事と料理をする。その日、息子は朝から家事をして、夫は料理の準備をしていた。Rは「夫が料理をするのはその日だけのことです」と言っていた。Rは、「専業主婦はとても嫌です。私は家にいると気がおかしくなりますよ。販売員でも、清掃員でもします」と語った。

性別役割分業に賛成かどうかについて、その他にも次のような回答があった。

O：私は大学を卒業したら、家にいて育児するより、社会で自分の名誉、地位を得ることに興味があります。

P：(Q：あなたは今家事をしていますか) しています。(Q：結婚したら家事をしますか) 家事はしませんよ。妻がしますよ。最初は助けるでしょうが、そのうちに怠けていくでしょう。(Q：日本人は夫が働いて、妻が家にいる。あなたはこれについてどう思いますか。)(それは-筆者補) そもそもヨーロッパ式でしょう。わたしもそのようになると思います。でも妻は何もしないで、家にいても大変でしょう。韓国のように毎日連続ドラマがあれば違うでしょうが、(連続ドラマが放映されていないので-筆者補) つまらないでしょう。主婦になったと文句を言うでしょう。

Q：私は個人という意味で、社会と関わって、自分を発展させるべきだと思います。だから、夫の給料は生活に十分であっても(私は-筆者補) 仕事をして、自分を発展させます。

以上から、F「その人の自らの気持ちを大事にする、自ら決めるべきです」とP「ヨーロッパ式でしょう。私もそのようになると思います」という回答からは、夫が仕事で妻が家事という性別役割分業を受け入れる男性がいることがわかる。一方、Gのように専業主婦を受け入れない人もいる。R、O、Pなどの女性は専業主婦になることを受け入れない意識を示している。

専業主婦について、男性のG、F、Sは、「発展しません」、「お金のためより、自己研鑽やみんなと一緒にいることが大事」、「何もしないで、家にいるのも大変です」、「つまら

ない」などの言葉を使っている。専業主婦は社会と接しない、個人の社会的成長にはよくないとみている。つまりこの三人の男性にとって、女性が仕事をする事は、社会と接することであり、女性個人が社会化することと理解し、妻の社会と接触し、個人の社会的価値を高め、社会で女性個人として生きようとする生き方を尊重する姿勢が伺える。

一方、女性が専業主婦を嫌う理由について、R、O、Qは「家にいると気がおかしくなります」、「名誉、地位を得ることに興味があります」、「個人という意味で」、「社会と関わる」、「自分を発展させる」などをその理由として挙げている。社会との接点がなくなるので不安である、自己のもつ価値を実現する、社会的地位を得る、これらが専業主婦になりたくない理由である。つまり、女性にとって仕事をする事は社会と接する、社会的地位を得る、自己の社会的価値を実現することが重要であるとR、O、Qは認識している。

以上の聞き取り調査の結果から、調査対象者の家族の役割分業が五つのパターンに集約できることがわかる。

第一は、夫は公共領域を担って家内領域を担わず、妻は家内領域を担いながら公共領域に進出するパターンである。

第二は、夫も妻も家内領域と公共領域の両方を担うパターンである。回答者は妻が家事を担うべきであるという意識を持つ。

第三は、夫婦間にははっきりとした役割分業がなく、夫も妻も家内領域と公共領域の両方を担うパターンである。

この第二と第三のパターンはともに男も女も公共領域、家内領域両方を担うと書いているが、内容は違う。「第二」には妻は家事の担い手であるとの意識（J、I、K、Eのケース）があり、「第三」には平等的であるという意識（M、L、F、O、Aのケース）が存在する。Jは「二人で家事をします」と言い、「家事といえば女性が多くやる義務があります」のでJは家内家事、Jの夫は家外家事をやる。Jはゲル地区に住んでいるので、家の中の家事も家の外の「水を汲む」、「燃料を用意します」なども家事とみている。Iは家事をするが、「たまにする」ぐらいで、家事参加の頻度が低い。Kは家事を「こまごました」ものとみる。Eは、夕食は夫婦協力する、夫婦の役割分業では夫の役割のほうが妻よりも多い、妻は家事をすると答えた。この4ケースの共通点といえば、妻が家事の担い手であるとの意識を持っていることである。ところが、Mは「役割をわけていません」、Lは「平等に」、Fは「家族は平等な関係をもっています」、Oは夫婦ともに家事する、Aは「モンゴル人の家庭の中に役割に決まりがありません」という認識を持ち、役割分業意識を持っていないことが共通している。

そして、実際の例は少数であったが、第四は、夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担うパターンである。Nの答えである。Nの家庭では、妻は家事をしない。第五は、夫は公共領域、妻は家内領域を担うパターンである。Hの家族では、夫が仕事に専念

して、妻が育児に専念している。

また役割分業観については、男性である I と G は妻が家内領域を担うことを支持するが、G は妻が公共領域に出ないことに反対する。F と P は男女の役割分業を受け入れる。女性である B、C、D、H、J、E、K、R は家事を担うことを受け入れるが、専業主婦になるかどうかにかかわらず答えた R、O、Q は専業主婦に反対する意見を出した。

自分の妻が公共領域に進出することを支持すると述べた男性は、妻が社会と接触し、社会の中で個人として社会的価値を獲得することを重視しているとの考えを示している。専業主婦化に反対する三人の女性には、社会との接触、自己の社会的価値の獲得、自己価値の実現、一人の個人として生きることが重要であるという意識が示されている。

5. 夫婦の役割分業の多様化とそれをもたらした原因

4 で提起した夫婦の役割分業の五パターンを下のように整理しておく。

- ①夫は公共領域。妻は家内領域を担い、公共領域に進出する（B、C、D）。
- ②夫も妻も公共領域と家内領域を担う（E、I、J、K）。
- ③夫も妻も公共領域と家内領域を担う（A、L、M、F、O）。
- ④夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担う（N）。
- ⑤夫は公共領域、妻は家内領域を担う（H）。

このうち、①と②の、妻が家内領域に位置することはモンゴル人の遊牧生活から由来する役割分業観と結びつけて考えることができる。冒頭でも先行研究から引用して論じたように、遊牧地域におけるモンゴル人の役割分業は、夫は家庭の筆頭者であり、家畜の放牧、荷を運ぶ、狩りをするなどであり、妻は家事、育児、乳製品の加工、小家畜を放牧など、というものであった。

モンゴルの牧民夫婦の役割分業はその伝統的住まいであるゲルの中の男女の空間分配に示されている。ゲル（図5）は円形で直径4～6mほどの居住空間である。ドアは一般に南向きである。伝統的な様式のゲルは右半分が夫の居住空間、左半分が妻と子どもの居住空間である。中央にかまどを置いて、暖をとり、料理するのに使う。かまどの北側はゲルの上座であり、主人が座る。ここには女は近づくことができない。客は右半分に座る。妻の座る左半分には料理道具、乳製品を作る道具、食材などが置かれ、妻の作業場でもある。夫婦の空間がこのように分かれているとともに、性別による役割もわかれている。

聞き取り調査対象者の中のB、Dの家庭内部にははっきりとした役割分業があり、夫は家事、炊事を担わないという。Cは「モンゴル人の伝統的な役割分担に従って」と答えた

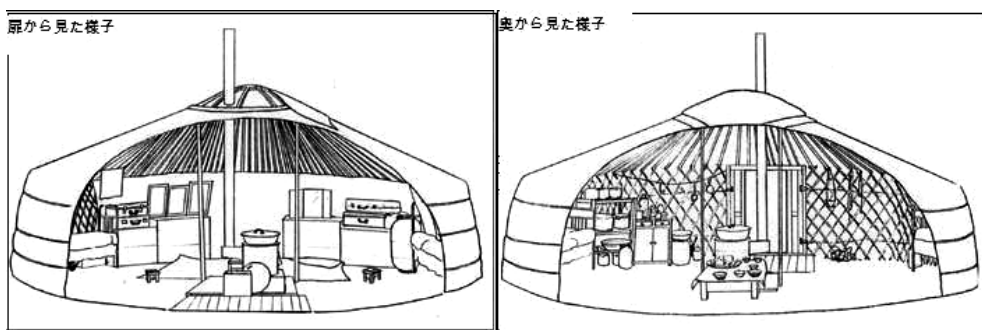


図5 ゲル内部の構造

（出所：ゲル博物館 <http://nozawa.site.ne.jp/mongol/gel/kumitate/kumi.html>、

2014年7月19日アクセス）

上で、「伝統的な役割」を自ら「家事は私がすることが多いです。料理は私がします」と解釈した。Eは「生活していく面では、夫の役割はより多いです。私は家事などをします」と答え、Jは「家事と言えば、女が多くやる義務があり」、夫は屋外の体力を要する家事を担うと答えた。以上の証言からは、妻は積極的に家の中の家事をして、生活上の多くの役割を果たしているとして夫には家事参加を求めない考えを読み取れよう。この中で、生活上に夫の役割が多いと妻が考えているのは遊牧生活に由来する部分であるといえる。またアンケート調査において調査対象者が性別役割分業に対して半数以上が賛成していることや、女性の方が男性より多く洗濯・掃除と炊事を担っている家庭内部の性別役割分業の実態も遊牧生活に由来することと考えられる。

パターン③は社会主義時代に影響されたパターンである。1960年の憲法第7章第84条では「モンゴル人民共和国の婦人は、政治・経済・社会行政管理・文化の全部門において男子と同一の権利を享有する」（『モンゴル人民共和国の新憲法』（下）1961：26）との定めがある。1973年の家族法には、結婚者の義務について15条の第2項に「お互い平等に家事労働に参加し、教育レベル、技術水準を高め、国民が役割を忠実に果たすためにお互いが助け合う義務がある」（*Bügd Nairamdah Mongol Ard Ulsyn Ger Būliin Huuli* 1973：12）と定めた。1976年に党中央が発布した「社会主義生活様式」には「家族の中で、母、女性を尊重し、家事を全員で協力して行う習慣が有るべきだ」（*Ulaanaa* 1980：11）と書かれている。1988年の家族法の解釈では「家庭、家庭内部関係に残っている時代遅れな風習をなくすことは家族法の一つの目的であると第一章に指示している」（*BNMAU-yn Ger Būliin Huuliin Delgerengüi Tailbar* 1988：7）とあり、夫婦の平等を例挙した。このように政府は家事における協力を宣伝して、遊牧生活由来の性別役割分業を排除することを狙っていた。

前節で分析したA、L、M、F、O、Nのケースでは、家内領域の役割分業について、「平等」とか「モンゴル人には役割分業がない」という二つの考え方があ

認識にせよ、役割分業がないという認識にせよ、夫婦ともに家事をし、家庭内部の役割を分業していないことは社会主義時代由来と言える。

上のパターン①～④の共通点は妻が公共領域に進出することである。妻が公共領域に進出することについて、社会主義時代の女性の就労は「夫の奴隷、家庭のメイド」から救う「生産生業に引き出し、経済的に制限されている状況を撲滅する」ためであった（Pürevdorj 1981 : 71）。しかし、社会主義崩壊後、国家が男女共働きを強制しなくなったにもかかわらず男女共働きは継続している。モンゴルは市場経済移行期のショック療法によって経済的困難に直面した。この経済的困難によって家計も強いダメージを受け、支出が収入より多くなり（表1）、家庭の負担が大きくなったので、女性が働かざるを得ない状況になったために女性が労働市場に押し出され、男女共働きが継続しているのである。

役割分業観に関する聞き取り調査への回答を分析すると、回答者男女ともに女性の社会との接触と社会的地位の獲得を重視していることがわかった。つまり客観的要因を除けば、女性は主観的にも社会との接触や個人としての自立を目指して公共領域に進出している。妻の公共領域への進出は社会主義時代からのことであるが、体制転換以降は、その本質は、国が積極的に働きかけ、男女平等を撲滅するとして女性を生産生業に引き出すことから、女性は経済的困難を克服するため、または社会と接触し社会での地位を得るために働くことへ変わった。

パターン⑤のように、夫は公共領域で妻は家内領域という性別役割分業に従うことは民主化以降の新しい特徴である。モンゴル国全体の経済状況は1994年にプラス成長に転じて以降、2009年にマイナス成長を経験した以外は順調な発展を継続し⁴⁾、かつての経済的困難を脱した。表1を見ると一世帯の平均月収入は2011年からプラスに転じた。このような経済発展は、女性を労働市場に押し出した状況が好転したということでもあり、論理的に考えれば、これによって労働市場に出て行かない女性が登場すると想定できる。聞き取り調査では、少数であったが専業主婦の存在が確認された。第4章に挙げた38歳のHは専業主婦だった。夫は遠く離れている炭鉱で働いている。Hの回答はすでに上に示したが、そこにも現れていたように、専業主婦として子育てに専念している原因は、Hの子どもが幼稚園に入れなかったことであった。もう一人の専業主婦の例は筆者が住み込んだゲル地区のGの家族である。家族はGの妻、Gの弟とその妻の4人であった。2012年の調査当時には弟の妻が妊娠中だったが、彼女はデパートでパートタイムの仕事をしていた。出産後は育児生活をしている。Gに、弟の妻がなぜ就職しないかと聞くと、不動産会社で働いている弟の給料が十分だから妻が働く必要はないと自慢していた。その専業主婦の家庭では、育児をするために夫が仕事をして、妻が家内領域に残るという性別役割分業

4 日本国外務省ホームページ、モンゴル基礎データ、
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html> (2014年9月3日アクセス)

をしているのである。しかしHが「最近では妻も仕事をするようになってきている」とも答えている。このことから、モンゴル人が遊牧生活で形成してきた「女性は家事を担う」という役割意識は回答者本人に根強く存在しているといえる。これは瀬地山の言う「社会主義化が交代したときに、家父長制の復活がみられる時期である」、そして「高収入層では主婦も誕生する」ということと一致して、民主化以降にモンゴルでの性別役割分業が出現したのは家族領域の脱社会主義である。

したがって、パターン⑤は脱社会主義型性別役割分業である。このパターン⑤が示す性別役割分業がイメージとしての「近代家族」の特徴の一つである役割分業と同じものである。ただし、このパターン⑤の存在は「近代家族」論がいう主婦誕生ということではなく、働く女性は当然の間存在するだろう。なぜなら、聞き取り調査から、調査対象となった女性が個人として高い自立意識を持っていて、一方の男性の中にも、妻が専業主婦になることを受け入れるが、妻が専業主婦になるかどうかは自ら決めるべきだという意見があるからである。「近代家族論」が存在する前提は、資本主義近代という歴史の時代である。21世紀の家族は個人の選択の自由であり、社会は個人を単位とする社会になると論じて、その変化の要因として、女性の脱主婦化が取り上げられるのであるが（落合2008：230）、モンゴル国が現在歩んでいる民主主義と市場経済の時期に現れた専業主婦は、「近代家族論」で論じられている「性別役割分業」とは一致しない。モンゴルの都市社会に現れた専業主婦は、社会主義時代を経験して、現在の民主主義・市場経済期を歩んでいる国に現れたものである。H、Gの家族で出現した専業主婦は、その家計が許している時に限って現れたものなのである。

6. 結論

本稿では、性別役割分業を内包する遊牧文化を国の基底にもち、約70年にわたる社会主義国家・計画経済を経験し、そこから民主主義国家・市場経済へと移行しつつあるモンゴル国の、社会主義崩壊による政治体制転換期以降の都市家族における家族内部の夫婦の役割分業の実態に近代家族論の角度から迫り実証研究を行った。

聞き取り調査から得られた夫婦の役割分業には、

- ①夫は公共領域。妻は家内領域を担い、公共領域に進出する。
- ②夫も妻も公共領域と家内領域を担う。
- ③夫も妻も公共領域と家内領域を担う。
- ④夫は公共領域と家内領域を担い、妻は公共領域を担う。
- ⑤夫は公共領域、妻は家内領域を担う。

これら5つのパターンがあった。これらは遊牧生活由来の性別役割分業（①と②）、社会主義型夫婦役割分業（③と④）、脱社会主義型性別役割分業（⑤）に分類される。このよ

うに、現在のモンゴル国の都市家族には、近代以降のモンゴル人、ここでは現在のモンゴル国に住むモンゴル人を指すが、彼らの夫婦の役割分業には、まだその歴史的生活と経験から抜け出していない部分があることが明らかである。本研究の仮説として用いた近代家族の特徴の一つである、夫が公共領域、妻が家内領域、という性別役割分業は、モンゴルの民主主義国家・市場経済期の都市家族こそに現れていることは重要である。

「近代家族論」が、近代という歴史の経験も、そしてこれまでの生活の基盤もが異なる多様な現代のアジアを単線化して定立しようとするならば、これは明らかに普遍性を持ちえないだろう。多様な近代のあり方を意識した「近代家族論」の必要性を、近現代のモンゴルは示してくれている。

参考文献

(日本語文献)

- 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』、勁草書房、2000年。
落合恵美子『21世紀家族へ』（第3版）、有斐閣、2008年。
鯉渕信一「モンゴルの社会主義下における伝統的家族の変容」『現代社会における家族の変容Ⅱ：東アジアを中心に』 亜細亜大学アジア研究所、2005年、37-60。
鯉渕信一「現代モンゴルの家族関係とその諸問題」『現代社会における家族の変容Ⅲ：東アジアを中心に』 亜細亜大学アジア研究所、2007年、5-30。
小長谷有紀『モンゴルの二十世紀－社会主義を生きた人びとの証言』、中公叢書、2004年。
瀬地山角『東アジア家父長制－ジェンダーの社会学』、勁草書房、1996年。
モリス・ロッサビ著、小長谷有紀訳『現代モンゴル－迷走するグローバリゼーション』、明石書店、2007年。
「モンゴル人民共和国の新憲法（下）」『アジア経済旬報』 一般社団法人中国研究所（476）、21-28（1961年8月11日）。
山田昌弘『近代家族の行方－家族と愛情のパラドックス』、新曜社、1994年。

(モンゴル語文献)

- Dondog, Ts. *Ger Bül Soyol Irgenshil*. Ulaanbaatar, 1977.
BNMAU-yn Uls Ardyn Aj Ahui 65 Jild. Ulaanbaatar, 1986.
Bügd Nairamdah Mongol Ard Uls-yn Ger Büliin Huuli. Ulaanbaatar, 1973.
Ulaanaa, G. *Sotsalist aj töröh yos ba ahui soyol*. Ulaanbaatar, 1980.
BNMAU-yn Ger Büliin Huulyn Delgerengüi Tailbar. Ulaanbaatar, 1988.
Pürevdorj, L. *BNMAU dahi Ger Büliin hariltsaany zarim asuudal*. Ulaanbaatar, 1981.

（ウェブサイト利用）

ウランバートル市統計局ホームページデータ提供システム

<http://ubstat.mn/StatTable=363>（2014年7月8日アクセス）

国連開発計画 UNDP Labour force participation rate (female-male ratio).

<http://hdr.undp.org/en/content/labour-force-participation-rate-female-male-ratio>（2014年9月6日アクセス）

モンゴル国国家統計局国家統計局統計情報サービスシステム

http://www.1212.mn/contents/stats/contents_stat_fld_tree_html.jsp（2014年9月28日アクセス）

独立行政法人国際協力機構、株式会社インテムコンサルティング「国別ジェンダー情報整備調査モンゴル国報告書 2013」

[http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject1501.nsf/cfe2928f2c56e150492571c7002a982c/74875bed7d20467349257b010026a259/\\$FILE/ATTUNPW0.pdf/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%89%88%202013.pdf](http://gwwweb.jica.go.jp/km/FSubject1501.nsf/cfe2928f2c56e150492571c7002a982c/74875bed7d20467349257b010026a259/$FILE/ATTUNPW0.pdf/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%89%88%202013.pdf)（2014年12月2日アクセス）

キーワード モンゴル国、都市家族、政治体制移行国家、近代家族、夫婦の役割分業

(Urlag)